

---

# Phantasy Star ZERO Fantasia

荒地

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

P h a n t a s y   S t a r   Z E R O   F a n t a s i a

### 【Nコード】

N 9 9 4 5 J

### 【作者名】

荒地

### 【あらすじ】

新米ハンターである主人公が、様々な冒険や色々な人々との出会いを繰り返し、ハンターとして、人間として成長していく物語。

## 第一話 出逢い（前書き）

初めまして、モフモフです。Fantasia頑張って書きますので、応援宜しくお願いしますm(\_\_\_\_\_)m。  
一応、二次創作です。嫌いな方は読まないことをお勧めします。

## 第一話 出逢い

「はあ、はあ。ここのモンスターは、どんだけ出て来るんだア？」  
と、少しキレ気味に文句を言っているのは……

STAR（種族：ヒューマン 職業：ハンター・男 装備：片手剣<sup>カトラス</sup>）  
だ。

「文句言わないの。出て来る敵は倒すだけよ<sup>エネミー</sup>」  
彼を宥めているのは……

サリサ（種族：ヒューマン？ 職業：ハンター・女 装備：短杖<sup>ウオンド</sup>）  
である。

彼らは、ここグラーシア渓谷でドラゴンを撃退するという依頼<sup>クエスト</sup>を進  
行させている。

何故こうなったかと言うと…… サリサの乗っていた脱出用カプセルの破片がSTARの顔面に落ちてきたからだ。

「何この脱出力プセル、壊れてるじゃない！？キチンと点検されてなかったのねきつと……。どとどどうしよう！？何をどうしてどうなるう！？」

自分でも、言っていることが整理できなかった。

ヒュ、と空に響く花火の打ち上げるような音が、それを如実に表していた。

STARは、その音に気付き、空に目をやると脱出用カプセルの破片が、すぐ上に迫っていた。

「う、うわアアア……」

その叫びに反して、破片は降って来る。

その刹那、破片がSTARの顔面にクリティカルヒットした。

サリサは破片がぶつかって気絶したSTARをテクニック・回復<sup>レスト</sup>で

介抱した。

STARが意識を取り戻したので、

「良かったあ……」

と安心した様子でサリサが言った。

「君ハだれだい？」

そう訊くSTARに答えて、

「私は、サリサよ」

と答えたので、STARも自己紹介をした。

そのあと、サリサに、

「依頼ハ？」

と訊いた。

「依頼つて、このモンスターを全て倒すこと？」

「違うヨ、奥の、ドラゴンを倒すことダヨ」

と、言ったのを聞いて、

「続いてるよ。だったら、私を仲間にしてよ、一人だと大変だろうから」

と、サリサが、手伝いたいと言った。

そして、今の状況に至る。

T o b e c o n t i n u e d .

## 第一話 出逢い（後書き）

どうも、朝宮です。

友人のモフモフさんの書いた物を歌成音さんが若干手を加えた作品です。

初投稿となりますので未熟な点もございますが、今後も「荒地」共々どうか御贔屓に。

御意見・御感想・アドバイス、お待ちしております。

## 第二話 活躍（前書き）

どうも、モフモフです。

皆さん、私の作品楽しんで頂けていますか？

そんな方も、そうでない方も、今後とも宜しく願いますm（  
ー）m。

それでは、本編へどうぞ。

## 第二話 活躍

STAR達は、随分と奥に進んで来た。

STARが、

「エネミー、沢山いるネ。俺に、任せなさいヨ」と言つて斬りに掛かる。

STARが狙うエネミーは、ドラゴンガウルの子供だ。

コイツは、炎のテクニクであるフォイエつかを使用ってくる。

打撃攻撃はタツクルのみだが…。

どちらの攻撃もダメージは大きい。

そして、攻撃後の隙も又大きい。

「今だ、突撃ダア！」

と声を張り上げるSTAR。

「クロスレイブ！」

掛け声と同期するように飛び上がり、目の前を十字に切り付けた。ガウルを一撃で斬り倒す。

「すごい…」

サリサが呟いた。これぐらいのことは、STARにとっては当たり前のことなのだが。

驚いた顔をしているサリサをよそに先に進むSTAR。

張りきつて小鷲ヴァルカーを倒しながら進んでいく。

サリサは氷のテクニクであるバータをSTARの後方から放ち、

STARを援護してそれらを倒した。

「すごいネエ。ん？待てよ、サリサ。君もヒューマンだよネ？」

STARが、サリサに尋ねる。

サリサは、

「そうだけど、どうかした？」

と答えた。

それにSTARは、



「いや、何でもないヨ。聞いてみただけだヨ」と返した。

STARが言いたいののは、ヒューマンは接近戦が得意なのに、サリサがテクニクをよく使う事が気になったということだ。

モンスターを倒すと、暫くしてアイテムボックスが出現した。

これは、破壊する以外に何もなさそうだ。

破壊するとアイテムが散乱<sup>ちりぢり</sup>ばった。

それらは、この後に役立ちそうな品々だった。

一番役立ちそうな物は大剣<sup>ソード</sup>だった。

攻撃力は高いが、動きが鈍くなってしまう。

言わば、諸刃の剣だ。

扱い慣れる迄に時間が掛かるだろう…。

STARは武器を大剣<sup>ソード</sup>に持ち替えた。

そして、使い慣れない大剣<sup>ソード</sup>に振り回されない様にするため、2 / 3 度試しに振って見る。

ブンッ。

風を斬る音が心地良い。

STARは、この大剣<sup>ソード</sup>が気に入った様だった。

素振りを終えてから奥に進むと、ワープゾーンがあった。

STAR達は、それに向かって進んだ。

To be continued

## 第二話 活躍（後書き）

どうも、朝宮です。

今回もモフモフさんと歌成音さんが頑張ってくれました。

誤字・脱字、アドバイス等ございましたらどんどんお送り下さい。  
それではまた次回。

### 第三話 期待（前書き）

どうも、モフモフです。今回は、サリサのイメージがチェンジするかも知れませんか（＾w＾）

何がどうかは、読めば解ります。では、どうぞ。

### 第三話 期待

ワープゾーンに入ると…、中間地点にワープしたらしい。

そこには、ヴァルカー2羽と赤い双角獣<sup>ヘリオ</sup>がいた。

ヘリオンは、炎属性の攻撃を得意としている。

と言っても、飛び掛かりやのし掛かりだけが…。

喰らえばほぼ確実に火傷を負ってしまう。

「私に任せて」

とサリサが言ったので、STARは彼女に任せることにした。

サリサはウオンドをヘリオンに振りかざし、詠唱を始める。

「喰らいなさい。氷付けにしてあげるわ」

そう言っていると、氷属性中最強のテクニク・ラバータを当てた。

ヘリオンとヴァルカーを瞬く間に凍らせてしまった。

「……………」

STARは、呆然としている。

なぜならSTARは、サリサがそこまで強いと思っていたいなかったから。

彼女に対するイメージは、”サポート役”というものだった。

だが彼女は、STARのイメージをぶち壊した。

我に戻って気が付く。

早くトドメを刺さなければ、と。

STARはサリサに呼び掛ける。

「早くトドメを刺しなヨ！」

それを聞いたサリサは、氷撃<sup>バータ</sup>を放つ。

サリサがトドメを刺すと、謎のテレポーターが出現した。

謎のテレポーターは、ゲート状の装飾が施されている。

「入ろうヨ」

と、興味津々様子で誘うSTARに対し、

「厭な予感がするわ」

と心配するサリサ。

そんなことは聞かずに、STARはテレポーターへと足を踏み入れる。

後で後悔することになるうとは、誰も知る由も無かった。

「ここは、なんだネ？」

その呼び掛けに答える様に響く声が、聞こえる。

『ここはアリーナ。汝らには、ヘリオン共と闘ってもらう。勝てば、景品をくれてやろう。だが、負ければモンスターどもの餌になってもらうぞ』

声が消えると、目の前にヘリオンと、ヘリオンの亜種である、黄色い体色の一角獣フレイスヘリオンが現れた。

一匹でも面倒なのに、三匹同時は危険窮まりない。

「…ド畜生」

STARが言った。

この二人に勝機は有るのか？

T o b e c o n t i n u e d

### 第三話 期待（後書き）

どうも、朝宮です。

月一更新の自分としては週一で更新できるモフモフさんが羨ましいです。

それでは皆様、また次回。

御意見・御感想お待ちしております。

#### 第四話 後悔（前書き）

モフモフです。

まず、前回不手際が有ったことをお詫び申し上げますm（　　）m

今回は、気をつけたので大丈夫だと思います…。

読んでみて、変な所はご指摘下さいm（　　）m

では、どうぞ。

## 第四話 後悔

「面倒ダナア」

STARが面倒くさそうに言って、何かを探し始めた。  
フリーストラップ  
探していたのは、氷結罷だ。

「仕掛けたヨ。ヘリオンども、かかって来いや！」

STARが、上げ調子で挑発する。

ヘリオン  
双角獣たちが、STARに近づいたその時、フリーストラップが炸裂する。

ヘリオン  
双角獣たちが、凍り付けになった。

「チャーンス！」

ブレイズヘリオン  
STARが一角獣に突っ込む。

斬って斬って斬りまくる。

その後ろから、サリサがテクニクで援護する。  
フリーストラップ  
だが、無情にも氷結罷の効果が切れてしまった。

ヘリオン  
双角獣達が動き始める。

そうして、生き残りが突進で来る。  
つつこん

ブレイズヘリオン  
ただ、一角獣が潰したので、先程よりはマシだ。

「一匹ずつ潰していくヨ。その方が、早く片付くと思うカラネ」

サリサは、その意見に賛成した。

STARが斬りつけ、サリサがテクニクを当てる。

ヘリオン  
残りの双角獣の一匹が倒れた。

最後の一匹が、STARを襲う。

低度の火傷とかすり傷を負った。

それにも構わず、STARは双角獣ヘリオンに向かう。

そして、トドメをさした。

その場で痛がるSTARを、サリサが手当てする。

どうやら、痛みを今まで感じなかったらしい。

手当てをしているサリサが、STARの事で気になっていた事を聞



いた。

「今まで、一人でやって来たの？」

STARは、

「カイと言う仲間がいたヨ」

と答える。

サリサは、

「いたつて、どういうこと？」

と、訊いた。

STARは、

「シティーに帰ったヨ」

とだけ答えた。

サリサは、その話に納得できなかった。

そんな中、アイテムボックスが現れた。

例の景品という奴だろう。

STAR達は、それらを叩き割った。

中には、低ランクの武器や防具を強化するアイテム、モノグラインダーが入っていた。

景品を取り、アリーナを後にした。

T o b e c o n t i n u e d

#### 第四話 後悔（後書き）

どうも、朝宮です。

不手際、というのは前回のラスト付近、ヘリオンとブレイズヘリオン合計三匹の比率のことだそうです。  
では皆様、また次回お会いしましょう。

## 第五話 目的（前書き）

どうも、モフモフです。すみません、また、ミスしてしまいました。  
今までの五話は六話です。では、どうぞ。

## 第五話 目的

アリーナからだと、巨大なテレポーターがあった。それは、恐らく先にはこの依頼の目標クエストの目標ターゲットがいるのだろう。STARとサリサは、準備を整えてそれに向かった。

どうやら、崖の近くに飛ばされたらしい。

予想通りに、今回の目標である炎竜ターゲットがいた。

見た目こそ小さいが、本物のドラゴンだ。

サリサが、

「本当にこんな所にドラゴンが居たんだ。本でしか見たこと無かったのに……」

と言った。

サリサは、初めて見るらしい。

STARも、そうだ。

そんな呑気な事ばかり言っては居られなかった。

炎竜レイバーンが、襲い掛かって来る。

早速、炎息吹ヒートブレスを吐いてくる。

サリサは、モロに喰らってしまった。

「熱いッ！助けて！！」

と言っている。

援護する側が、される側になってしまっている。

STARは、サリサに状態異常解除薬ソルトアトマイザーを投げ渡す。

サリサはそれを、攻撃を受けた所に塗った。

サリサが、炎竜レイバーンに反撃をする、

「喰らいなさい」

そう言うと、炎竜レイバーンに雷撃ソンデを当てた。

レイバーンが、怯ひるんだ。

その隙に、STARが怒涛の攻撃を仕掛ける。

STARが、炎竜<sup>レイバーン</sup>を倒してしまった。

「はあ、はあ…やったよ。私たち、勝ったよ」

とサリサが嬉しそうに言う。

遠くから声が聞こえる。

「おい、STAR！」

この声の主は、カイしか居ないとSTARは思った。

その予想通り、カイだった。

「STAR、その娘は、誰だ？」

カイが、STARに聞く。

STARは、

「サリサだよ」

と答える。

カイが、サリサに

「はじめまして。立ち話もなんだから、シティーで話そう」と言った。

そのあとに、こう付け足す。

「STAR、サリサをシティーまでエスコートしてあげな」

STARは、サリサをシティーまでエスコートする事になった。

T o b e c o n t i n u e d

## 第五話 目的（後書き）

今回は、私、モフモフが後書きも書くコトになりました。どうでしたか？炎竜との闘いは。呆気なさすぎましたか？元がゲームなので多分そんなモノだと思います。では、次回もお楽しみに。

## 第六話 帰還（前書き）

モフモフです。ダイロンシティー、遂に登場です。名前の由来は市長の名前です。では、どうぞ（＾Ｏ＾）／

## 第六話 帰還

ダイロンシティーに着いたSTARたちは、 그레이の友人であるカイを捜した。

「カイ、出て来いヤ!」

STARは、叫びまくった。

そうこうして、カイは見つかった。

「カイ、話って何サ?」

그레이と話しているカイに、STARが話し掛ける。

「おつ、来たか」

とカイが言った。

カイが、続けてこう言った。

「話ってのは、サリサをダイロン市長に会ってもらうことだ」

サリサは、

「分かった」

と言った。

カイが続ける。

「市長の前で髪の話はするな」

サリサは頷いたが、頭の中にはハテナマークが浮かんでいる。

ドキドキしながら、会いに行くと

「やあ、良く来たね」

と言つて、市長が優しく迎え入れてくれた。

髪が薄くなっている市長は、

「やあ、STAR君」

とSTARに声を掛ける。

カイが、市長に

「どうしてそこで、アンタは俺をスルーするんだ?どう見たってオレがリーダーだろうが……」

と訊いた。



市長は、

「STAR君が近くにいたからね。なに、特に深い意味はないよ」と言い返す。

カイは、納得せざるを得なかった。

苦々しい表情のカイは、本題を切り出す。

「今日は、ハンターズの新人を連れて来たんだ」

市長は、

「ああ、そうだったね。君が、新人のサリサ君かい？」

サリサは、市長に

「私みたいなのが、ハンターズに入っても大丈夫なの？」

と訊いた。

市長は、

「カイ君辺りがそんな事を言ったのかね？ひどい奴だね、君は」と言った。

カイが、

「なんで、アンタは俺を嵌めようとするんだ？」

と聞き返す。

市長は、

「君の過去をバラしてしまうよりマシだろう？」

とカイに刺すような口調で言う。

カイは、何も言い返せなかった。

どうやら、カイには知られたくない過去がある様だ。

晴れて、サリサはハンターズの一員となった。

市長が、サリサに

「古代の遺跡を壊してる犯人を知らないかい？」

と聞いた。

「そんな、罰当たりな」

とカイが言った。

知らなければそれでいい、ということで話は締められた。  
市長の部屋から出て、カイが言った。

「STAR、これからはお前自身が依頼<sup>クエスト</sup>を決めろ」  
それを聞いたSTARは、快く承諾した。

To be continued

## 第六話 帰還（後書き）

今回も、私、モフモフが後書きも書いてみたいと思います。シティーの全容は見えませんでした。そのうち明かしていきたいと思っています。次回も、お楽しみに。

## 第七話 EXTRA・上巻（前書き）

どうも、モフモフです。フリークエスト、第一段です。市長の私情のクエストです。本物のゲームなら、クエストタイトルが、市長私情命令です。では、どうぞ（＾Ｏ＾）ノ

## 第七話 EXTRA・上巻

STARは、ダイロン市長の秘書のリンドウに呼び止められた。  
今回の依頼クエストの説明の様だ。

「STARさん、少しよろしいですか？実は、今回の任務について少しお話したいことがあります……」

STARは、話を聞く事にした。

リンドウは、STARを人気ひとけの少ない所に連れて行って、面と向かって話を始めた。

「このあたりなら、誰にも聞かれませんか。では、あらためて……」  
何か、言いにくい話のようだ。

「今回の任務なのですが、市長直々の緊急任務であることはご存知だと思います。」

ですが、緊急任務自体がすでにおかしいのです。緊急の依頼が来たわけでもありませんし、市長が求めている植物も、何かの特効薬というわけでもありません。

そもそも、資料にすらほとんど載っていない植物を、市長がどうやって知ったのか……。情報の出所すら分かりません。

……とまあ、ここまでの説明の通り、今回の任務については、分からないことだらけなのです。あの様な市長ですから大丈夫だと思いますが

何か、とても公言出来ない様な裏があるのかもしれませんが。

それだけは、気に留めておいてください。私も、市長の動きに気を配っておきます。」

そう言つて、更にこう付け足した。

「……それと、植物のある場所の近くにはドラゴンの巣があるので、くれぐれも気をつけて下さい」

それを聞き終えて、出発するSTAR。

“今回の依頼は面倒だな……”とSTARは一人で思っていた。

少し、不安が脳裏を過ぎつた。

T o b e c o n t i n u e d

## 第七話    E X T R A ・ 上 巻 ( 後 書 き )

今回も、私、モフモフが後書きを書くコトになりました。どうでしたか？S T A Rは面倒なクエストを受けたと思いませんか？まあ、どんな内容はそのうち分かります。では、次回も、お楽しみに。

## 第八話 EXTRA・中巻（前書き）

どうも、モフモフです。前回の続きです。後、一回はこの調子でいきますんでよろしくお願いします。



## 第八話 EXTRA・中巻

STARが随分進んだ頃のシティーでは、ダイロン市長は鼻歌を歌っていた。

「ふふふん、ふふふふん」

リンドウが、市長に

「……鼻歌とは、珍しいですね、市長。何か良いことでもあったのですか？」

と訊いた。

市長は、

「あ、ああ、リンドウ君か。ビックリさせないでくれたまえ。」  
と言った。

リンドウは、

「私は秘書ですから、いつでも市長のおそばにいますよ。繰り返しますが、何か良いことでも？」

と言った。

市長は、

「いや、特に何もないよ。気にしないでくれたまえ。」

とごまかす。

リンドウは、

「そうですか」

と呆れた様子で言った。

バレバレの嘘に気づかないふりをしていたのだが。

暫しの無言。

市長は、リンドウを自分の部屋から追い出そうとしたが、リンドウは

「私は、秘書ですから」

と言い外に行こうとしない。

「そう見られていると仕事がつらい。だから、席を外してくれたまえ」

とまで言われたので外に出た。

だが、やはり気になるので部屋を覗く事にした。

市長は、何かを探している様だ。

探し出した箱には、今回の依頼で採<sup>クエスト</sup>って来る植物が入っていた。市長は、その箱の中の植物をすり潰していた。

“ 変なことに、ならなければ良いのだけれど...”  
と、リンドウは願っていた。

T o b e c o n t i n u e d

## 第八話 EXTRA・中巻（後書き）

今回も、私、モフモフが後書きも書きます。どうでしたか？市長は、私情をクエストにしてまで発毛作用のある草が、欲しかったのでしようね。では、次回もよろしくお願いします。

## 第九話 EXTRA・下巻（前書き）

どうも、モフモフです。なんか、読む人達が日に日に遠ざかっていく様な気がしてならない某でございます。そんなコトは、さておき、この作品どうですか？自分では、イマイチ分かりかねるので、感想を下さい。では、EXTRAの完結編です。

## 第九話 EXTRA・下巻

STARが植物に近づいた瞬間、ドラゴンが現れた。  
だがSTARは、植物を抜き取り、あっさりドラゴンを始末してしまった。

その頃の市長は、リンドウを部屋に呼び入れていた。

「随分と早いねえ……」

と、市長はリンドウが部屋に來た早さに驚いた様だった。

「誰が來ても、ここに入れない様にしてほしい。大事な用事があるから」

リンドウは、その言に従う事にした。

しかしながら、そんな市長を心配にも思う。

ちょうどそんな時、STARが帰って來た。

リンドウがSTARに、芝居をして市長の部屋に乱入することを提案した。

しかし。

市長の部屋から、嗅いだことのない異臭が漂ってきた。

リンドウは形振り構わず市長の部屋へと踏み込んだ。

「な、何事かつ！？」

と、狼狽した様子の市長。

しかし、かなり奇妙な点があった。

リンドウは市長に、

「……市長？なにゆえ何故に、そのように頭を緑に染めていらっしゃるのですか？」

と訊いた。

市長ははぐらかそうとしているが、言葉が出てこないようだ。

その奇妙な光景と市長の頭皮の状況を鑑みて、リンドウは

「俗に言う毛生え薬ですか？」

と訊いた。

凶星だったらしく、市長はさらにうるたえる。

市長は、黙っていてくれるなら報酬に色をつけると言い出した。

だがリンドウは、そんな市長を手厳しく叱った。

勢い任せの市長に部屋を追い出されたSTARとリンドウ。

部屋の外で、リンドウはSTARに

「今日の事は、他言無用ですよ」

と釘を刺した。

報酬を受け取ったSTARは、啞然とした。

スクスクシャワーなんてその辺にありそうな短銃が追加されている  
ハンドガン  
だけだったのだ。

T o b e c o n t i n u e d

## 第九話 EXTRA・下巻（後書き）

どうでしたか？EXTRAは、主人公が市長でした。次回からは、元に戻ります。また、読んで下さい。

## 第十話 サリサの感動（前書き）

どうも、ご無沙汰です。モフモフです。最近、余りアイデアが浮かばなかったので、休んでました。でも、期待して待っていてる方も、いると思い蘇りました。では、どうぞ。



## 第十話 サリサの感動

今回の依頼は、リオウ雪原<sup>クエスト</sup>で捜査隊の救助だ。

サリサは、雪を見るのは初めてらしく、

「すごい……これが雪……なの？本で読んで、白くて冷たいって言うのは知ってたけど……」

と感動している。

カイは、サリサに、

「なんだ、見たこと無かったのか？まあ確かに、初めて見るとスゲーって思っよな」

と、言った。

サリサは、

「うん、すごいね！本に書いてあったよ、こう言うのを銀色の世界って言うんでしょ？これが全部、氷の結晶だなんて、とても信じられないよ」

興奮気味のサリサが言う。

カイは、

「へえ、良く知ってるな、そんなこと。お前のいたシティーってのは随分と教育に力を入れてたんだな。オレなんて、最初に見た時はホコリでも飛んでるのかと思ったぜ？」

と、肩を竦めてみせる。

「……え。ああ、うん。私のシティーがどう、と言うよりも私がそういうのを調べるのが好きだったのよ」

そんなサリサに、STARは、雪玉を投げつけた。

「わぶっ！な、何、それなに！？」

サリサはおもいきり取り乱した。

STARはサリサに雪玉を見せた。

「ああ、なるほど。雪を丸くして、それを投げたんだ。……で、なんで私に投げるの？」

若干引き攣った表情でSTARに訊いた。

それにカイが口を出す。

「STARはきつとサリサに構って欲しいんじゃないか？お前の雪を見る眼差し。今までで一番キラキラしてたからな」

それにサリサは照れて、

「べ、別にはしゃいでるつもりはないんだけど！もう子供じゃないもん！」

「まあとにかく、先に進むとしよう。捜査隊が冷たくなる前にな」と皮肉げに言った。

サリサは、

「どっちの意味かは分からないけど……さ、STAR、行こう」

渋々、といった顔でSTARもやってくる。

捜査隊が捜索対象とは皮肉なものだったが。

T o b e c o n t i n u e d

## 第十話 サリサの感動（後書き）

どうでしたか？また、感想下さい。では、また、次回…。

## 第十一話 ウサニー大パニック（前書き）

どうも、お久しぶりです。モフモフですよ。半年ぶり？に書きました。どうぞ、読んで下さい。

## 第十一話 ウサニー大パニック

少し先に進むと、ウサニーと呼ばれるウサギ型の敵が表れ出て来た。  
「うわあ、カワイイ！あれも敵なのかなあ？」

サリサが、嬉しそうに訊いてくる。

「どうやら、カワイイものが相当好きらしい。」

「カワイイけど、アレは敵だ。気は乗らないけれど倒さなければいけないヨ」

サリサは、スケッチブックを取り出して描き始めた。

絵だけでも、残したいらしい。

「まあ、絵ぐらいならいいだろう……」

カイも、絵というのは賛成らしい。

サリサ以外の、STARとカイは暫しの間は休息をとることにした。

とは言っても、ここは雪原だ。

「寒いナア……。サリサは、平気なのだろうか？」

STARは、少しサリサを心配した感じで独り言で呟いた。

「さあな？」

カイもまた、独り言で呟いた。

ただ、カイは身振りも交えているけれど。

どれ程の時間が経過したであろうか。

誰も分からない程の時間が経った様にSTAR達は感じたが、実際は一時間しか経っていなかった。

サリサが向こうで、

「出来たあ~~~~~」

と叫んでいる。

出来たらしいので、サリサを連れて、もう奥に進むことにした。

サリサは、ずっとニコニコとしていた。

そんなサリサにSTARは、

「あれよりカワイイと噂の敵もいるらしいヨ」  
と言った。

サリサは嬉しそうに頷いた。

To be continued

## 第十一話 ウサニー大パニック（後書き）

どうでしたか？先に進まない？そんなコトはないですよ！！少しずつ進みますよ。では、次回お楽しみに。

## 第十二話 調査隊の安否（前書き）

どうも、モフモフです。今回は、このクエストを次に繋ぐための話です。つまり中間地点です。  
では、どうぞ（＾Ｏ＾）ノ



## 第十二話 調査隊の安否

リオウ雪原の中間であろう場所でSTAR達の一行は立ち止まった。カイは、急にSTAR達に話を振った。

「ずいぶん奥までやって来し、少し休むとしよう。ところでSTAR、寒くないか？」

STARは、自分の心配よりサリサを心配して、

「サリサ、大丈夫？」

カイは、嬉しそうにSTARに、

「お、いいぞSTAR。自分より先に、仲間を気遣える様なら、ハントーズとして一人前だ」

と、言つて褒めた。

「STAR、私なら大丈夫だよ。でも、心配してくれてありがとう」と、サリサはSTARにお礼を言った。

暫くしてサリサは、何かに気づいた様に、

「ねえ。さつきから気になってたんだけど、あれは何？」

と、遠くに見える光の筋を指差した。

その光の筋は、空に向かって伸びている。

カイは、

「ああ、あれか。オレ達は、『天の柱』と呼んでいる光柱だ。ライトポール まあ、詳しくは誰も知らないのだがな。分かっているのは、夜にあつちの方向を見ると光の帯が見える。ただ、それだけだ」

と言つて、少しため息をついた。

それを聞いたサリサは、

「天の……………柱……………」

と呟いた。

カイは、この話題はもういいと言わんばかりに終わらせ様とした。

「まあ気になるよな？誰だつて一度はそう思うんだ、あれは何だろ

うな、って。けどな、その答えは誰も知らない。あの『天の柱』まで辿りついたヤツはまだ誰もいないからな。いずれ正体の分かる日が来るかもしれないが……それよりも、今は調査隊を助ける方が優先だろ?」

と言ったのを機にサリサ達は、真剣みを取り戻した。

サリサが、

「うん、そうだよな。今は、とにかく調査隊を探しに行かないとね」と言い終わった頃に何処からともなく声が聞こえてきた。

「……………誰か! 誰か、助けて下さい!」

STAR達は、気づいた。

「!? なんだ?」

カイが叫び、

サリサが人影を捉えて、

「……………見て! 誰か走って来るよ!」

走って来たのは、見た目から判断すると調査隊のメンバーの様だった。

「はあ、はあ、はあ。よ、良かった、ヒトがいた! お願いします、助けて下さい! 隊長が、兄が敵に襲<sup>エネミー</sup>われているんです!」

カイは、調査隊のヒトに、

「あなたはシティーに戻っててくれ! その方が安全だろ?」

サリサが、いつに無く真剣な表情で、

「ゆっくりしてはいられないね!」

と言ったが、カイはサリサに、

「……………って、なんだか嬉しそうだな、サリサ!」

サリサは、少し照れて頬をほんのりピンク色に染めて言った。

「え? ……うん。ちょっと失礼だけど、自分が物語の登場人物みたいな気がしてね」

そんなこんなで、STAR達は最深部に向かった。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 第十二話 調査隊の安否（後書き）

どうでしたか？いつもと一緒に？それはそうですよ、作者が変わらない限りはネ。では、次回お楽しみに（＾Ｏ＾）

### 第十三話 何のために？（前書き）

お久しぶりです。モフモフです。前回の投稿から早くも9ヶ月……。自分は、今回は考えに考え抜いたモノになったと思っています。では、本文をどうぞ（＾Ｏ＾）／

### 第十三話 何のために？

「ねえ、STAR。このあたりが危険なことはみんな知ってたんでしょ？それなのに、なんであのヒトたちはこんな危険なところまで来たのかな……」

サリサは心配しながら、尋ねる。

STARは、

「ロマンのため」

と、答えた。

サリサは、納得いかないという風に首を振っている。

「ロマンは大いに結構だが、あいつらの目的は、そういうのとは別のもんだと思うぞ？」

カイは、何かに気づいたらしい。

「つまり、こういう事だ。<sup>いにしえ</sup>古の時代の遺物ってヤツの中には、それこそ、オレたちの生活を変える様なすげー便利な物もある。調査隊は、そういうのを見つけるのが仕事だ。だが、それが安全なところにあるとは限らん。むしろ危険地帯にこそ多い。それでもあいつらは、命も顧みずに危険地帯に行くんだ。みんなのために、仲間のために、すげーモノを見つけるために、な」

と、というのがカイの考えらしいが、どこか自分のことを語っている様にしか聞こえなかったSTARだが、今はあえて聞かないコトにした。

「だからこそ、ピンチのときには、ハンターズの出番だ」

カイは、心得たと言わんばかりの顔をしている。

「ゴメンね。変なコト聞いて……」

サリサは、少し申し訳なさそうだ。

「大丈夫だ、問題ない。お前は、変じゃねえよ！」カイは、構わないとサリサを励ました。

「……………そ、そう？じゃ、先に進もう」  
STARたちは、調査隊たちの捜査に向かうためにさらに奥に進んで行くのだった。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

### 第十三話 何のために？（後書き）

どうでしたか？雪山も大分奥に進んで来ました。実は、次のシーンに戦闘が控えております故、また考えを深めて書いて来ますので、次回をお楽しみに。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9945j/>

---

Phantasy Star ZERO Fantasia

2011年8月15日22時38分発行